東高1年の歩み

2022年9月28日 体育大会

爽やかな秋空の下、体育大会が開催されました。コロナ禍の中、無観客開催も3年目となりました。レクリエーション競技では、選手も応援者も笑顔で楽しんでいました。

2022年11月28日～12月1日 修学旅行

宮島では英語で留学生を案内し、交流するプログラムを行い、広島市内では同年代の若者と平和学習活動をし、伝統と平和についてじっくり取り組むことができました。旅行の後半はクラス単位で岡山や四国を巡り、研修を楽しみました。

2023年2月1日 マラソン大会

前年度は新型コロナウィルス感染症蔓延防止のため中止となったマラソン大会でしたが、2022年度は開催されました。年明け前から体育の授業では長距離を走る練習を重ねてきましたが、参加者全員が完走することができました。

2023年2月28日 卒業式

次のステージに向かって力強く280名が羽ばたいていきました。思えば入学早々にコロナ禍で休学になり、3年間マスクを着けたまま高校生活でした。彼らの人生が素晴らしいものであるように願っております。

2023年4月5日 入学式

新たに287名の新入生を迎えて新年度がスタートしました。この3年間で学校行事も縮小したり省略したりで何とかつなげてきましたが、彼らが中心となって、古き良きものを残しつつ新しい伝統を築き上げてくれることを期待しています。

2023年6月 新しい形の授業

新入生はBYOD方式にて、1人1台学習用端末を活用した授業を行っています。各種オンラインサービスを利用して、スライド資料作製、相互評価などを行っています。写真は英語の授業でのプレゼンテーションの様子です。

2023年6月2、3日 千南祭

4年ぶりに規制なくお客さんを招いて千南祭を開催することができました。来校者数は2千人を超え、生徒だけでなく、保護者や地域の方たちもこの文化祭を楽しみにお待っていてくださったのだと実感しました。夢の祭典の役者もマスクなしで演していました。

2023年7月14日 2年生総探研究発表

2年生はSDGsの17目標を意識し、文理融合型のテーマを設定して文化祭のクラス展を実施しました。その検証と研究成果を近隣高校の先生方や静岡産業大の先生を招いて発表しました。環境問題だけでなく、次年度のクラス展に対する提言でも、ゼロからのスタートではあるが充実した日々を送っています。

「お前は何者か」と問うてくる「藤色」

産経新聞
特別記者・上席論説委員
井口　文彦
（55回、1982年卒）

「教師かな」と思い描いていた将来は筑波大学での4年間で変転、新聞記者になっていました。先のことなど、わからんものです。

担当はなぜか事件。それも殺人、強盗、誘拐、放火……という凶悪犯。東高で私は殺人の手口や捜査に最も詳しいOBでしょう。何の得にもなりませんが。

私が記者になった昭和末期の新聞社は今でいうブラック。厳しい徒弟社会で、情報が取れない記者には「人権なし」。休日の家族サービスなど「10年早い」。給料明細は悲惨。それでもやめなかったのは、特ダネの魔力でした。毎日新聞記者だった早瀬圭一氏が小説の中で主人公の記者にこう言わせています。その通りなので、引用します。

《この一瞬や。この一瞬の恍惚と体中からほとばしる興奮は新聞記者になった者しか分からん。いや新聞記者になっただけでは分からへん。事件記者や。事件記者になって特ダネ書かんことには味わえん。給料が安くてもボーナスが出なくても、女にもてなくとも、なんでもええ。この一瞬さえあったら…》

事件記者でいる間、私は勤め人である意識が希薄でした。取材事象にロイヤリティはあっても、会社にはゼロ。ですから現場を離れてマネジメントのラインに乗ったときは価値観が狂い、自分の中の軸を失いました。

そんなときに喝を入れてくれたのは藤色のユニホームでした。40代になろうとしていた頃ですからスタジアムで観た藤色の後輩たちは20歳以上もはなれ名前も顔も分かりません。が、青い清水勢を翻弄し緑の静学をねじ伏せる巧さと強さ。世代を超えて一流であり続ける藤枝東のブランドを守る無数の後輩たちに、こう問われたように感じたのです。

《で、先輩は何者かになったのか？》

そうだった。俺は何者かになりたかった。だからプレイヤーになったのに、全然ダメ。藤色の彼らは何者かになろうと歩んでいるのに、腐れサラリーマンと化した俺は何をやっているのだ。日常に埋もれ、見失い、ぶれていた。

今も藤色のユニホームは私にとって「ぶれない精神」と「継続の偉大さ」を体現する象徴です。まぶしいです。それに比べ自分は…と内省的になります。

サッカーを通じ、「お前は何者かになったのか」と問うてくる存在。「一流になりたい」と渇望させる存在。それが私にとっての母校・藤枝東高校です。うっとおしいけど、素敵でありがたい存在です。

サッカー部である前に

シックス ベリー ファーマーズ
松田農園 共同代表
松田　義人
（76回、2002年卒）

私は高校時代をサッカー部で過ごした。個人として満足いく結果は出せなかったが、情熱と愛情をもった先生方やスタッフ、素晴らしい仲間に恵まれ、一生の宝となる3年間を過ごすことができた。監督の服部先生からはたくさんの教えをいただいたが、中でも「サッカー部である前にクラスメイトや地域の人に愛される生徒になりなさい」と指導を受けたことが今となっては最も印象深く、とても感謝している。ただ、正直言えば、当時は大切なことだと思いながらも、ピッチでのプレーに夢中でそこまで徹いたとは言えなかった。私は、その後大学を経て、選手としては叶わなかった全国制覇を成し遂げるべく、プロサッカークラブのブロントスタッフとして清水エスパルスへ入社した。営業、企画、広報、普及など様々なセクションで仕事をさせてもらい、どの仕事においてもクラブを日本一にするためにはどうしたら良いかということを、常に頭に置きながら仕事をしてきた。その中で感じたのは、どの仕事も突き詰めていくと最終的には、愛されるクラブ、選手、スタッフでなければ、チームが強くなることも、クラブが安定した経営をすることもできないということだ。入社以来、愛されるクラブを目指し取り組んできたが、残念ながらエスパルス在籍期間中に全国制覇の目標は叶わなかった。

そして、約15年のエスパルス勤務を経て、実家の稼業であるいちご農家となった。サッカー界とは全く異なる業種で、ゼロからのスタートではあるが充実した日々を送っている。もちろん、今も大切にしていることは、服部先生の教えだ。美味しいいちごを作ることはもちろんだが、希少品種「桃薫」の栽培や、障害者雇用、学校等での公演、学生の農業体験の受け入れなどに取り組んでいる。愛されるための活動かというと違う気もするが、いちごを作るだけでなく、これらの活動を通して、結果としてたくさんの方々から愛され応援される農家になれればと思う。

先生の教えは、仕事はもちろんだが人生を歩んでいくうえで全ての事に通ずることだ。今日、多くの服部先生の教え子たちが様々なフィールドで活躍できている一つの要因は、きっとこの教えを心の中に持ち続けているからだろう。私の周りのプロサッカー選手になった仲間、そして社会人となった仲間も、個性はそれぞれだが、皆愛すべき二面をもった魅力ある人間ばかりだ。私も皆の活躍に負けないよう精進しなければ。ただ、肝心のいちごに愛されるようになるにはまだまだ長い時間がかかりそうだ。それでも愚直にこの道で努力を続けていきたいと思う。

随想

パスツールの金言

杏林大学名誉教授
神谷　茂
（44回、1971年卒）

フランスの細菌学者ルイ・パスツール（1822－95）は生命の自然発生説の否定、狂犬病ワクチンの開発、アルコール発酵現象の解明、低温殺菌法（パスツリゼーション）の発明などを成し遂げた近代細菌学の開祖であり、数多くの金言を残した。それらの中で最も有名なのが「幸運は準備の出来た人のみを訪れる」である。フランス語・英語表記は以下のとおりである。

L'hasard favorise l'esprit préparé.
Chance favors the prepared mind.

筆者は医学部卒業後、微生物学の道に進み、金沢大学、東海大学、杏林大学で病原細菌の病原因子・感染病態に関わる研究に従事したが、胃十二指腸潰瘍、胃癌などの原因となるヘリコバクター・ピロリ（以下ピロリ菌）も研究対象の一つであった。

2005年のノーベル医学・生理学賞はオーストラリアのWarren, Marshall両博士のピロリ菌発見に授与されたが、彼らのピロリ菌発見物語はこのパスツールの金言がぴったりと当てはまる。ロイヤルパース病院のWarren博士は長年の病理学医としての経験に基づき、胃粘膜にらせん状細菌が棲息し、何らかの病変を引き起こすものと考えていた。

1982年3月、消化器病医のMarshall博士とともに胃粘膜材料100例を対象として、細菌の分離培養を行うプロジェクトが開始された。最初の34例からは培地の種類や培養温度を工夫しても、該当するらせん状細菌は培養できなかった（培養は一般細菌に準じて37℃2日間とした。35例目の生検材料の培地への接種はイースター休暇直前に行われたため、培養期間をこの検体のみ5日間とした。イースター休暇を済ませ、研究室に戻ったMarshall博士は培養器からシャーレを取り出し、わずか11皿程度の細菌コロニーが形成されていることを発見した。ピロリ菌発見・分離培養成功の記念すべき日（82年4月14日）であった。ピロリ菌の培養には最低5日間が必要であることを知った彼らは残りの検体について5日間培養を行うことにより、100例の生検材料中12例からピロリ菌を分離培養することができた。大発見の裏に興味深いエピソードが隠されている。ピロリ菌発見は幸運の賜物だと言われるが、イースター休暇直前に培養期間を延長してまでも実験を継続したWarren, Marshall両博士の情熱（心の準備：prepared mind）がピロリ菌発見を導いたのではないだろうか。

一方、培養期間が2日間と決まっているからと言って、イースターホリデーの最中に病院の研究室に来てコロニーの有無を確認したならば、この大発見は生まれなかった。

頼まれごとは試されごと

株式会社食の学び舎くるみ
代表取締役
中野　ヤスコ
（旧姓　冨田）
（66回、1993年卒）

「スポーツと食産業をつなぎ、地域の健康課題に貢献する」という、大それた目標を掲げ、「食の総合プロデュース業」を楽しく営んでいます。「頼まれごとを引き受ける」その連続の先に、新しい発見やチャンスが多く待っていました。中学生の私は、受験問題のパターンをゲーム感覚でクリアすることがただ面白かったのです。それは東高に通う2歳年上の兄の背中を追いかけるための手段だったため、入学と同時に目標を見失い、お気に入りのタオルを敷いて睡眠授業に精を出す毎日。サッカー部を横目に、ただ球を打つだけの「名前だけの」テニス部部長。当然、成績は恐ろしいものでした。あの制服で一歩外に出れば「優等生」と見られてしまう。そのギャップから、劣等感に苛まれ苦しむ日々でした。「夢祭」での役割はもちろん与えられず、主役たちや芸術系作業に長けたメンバーたちを支えるにはどうしたらいいのか。辛うじて料理や菓子作りが得意だった私にできることは、おにぎりやスイーツを大量に作り、差し入れすること。そこに自分の居場所を見つけた気がしました。

劣等感の塊だった私は、「自分を知っている人がいない土地・食に関する学部・こんな私でも受け入れてもらえる」の3つの条件がクリアできる「逃げ場」を探します。管理栄養士専攻がある東京の大学が、奇跡的に受け入れてくれました。幼い頃から“放置プレイ”の両親に甘え、国家資格を使うことなく地元で事務職員として働き25歳で結婚。3年後には息子たちにも恵まれ、この生活がなんとなく続くと思っていたのに、人生が変わっていきました。

副業禁止の時代、サラリーマンなのに大手料理教室の講師を頼まれる、野球のルールも知らないのに、同級生である現藤枝東高野球部監督に、部員の栄養指導を頼まれる、幼稚園と小学生の子供がいるのに、トップアスリートの海外合宿や世界大会に月単位で帯同する業務を頼まれる、経験もないのにクリーンの管理栄養士だというだけで、食の加工や流通、販売促進事業を頼まれる…。頼まれごとを引き受け、がむしゃらにやっていたら劣等感は消え、毎日が楽しくなっていました。そして…あっという間に子供たちは成人していました。

私の人生の転機の大部分には東高の先輩、後輩、同級生がいて、現在も支えられています。サッカー部の栄養サポートも続けさせていただき、我が子よりも若い子たちに囲まれて幸せです。藤枝東高に行って本当に良かったです。

恩師を訪ねて

伊東　巳代治先生

〈2010年4月から2017年3月、2018年4月から2023年3月まで在籍〉

2010年、母校・東高に赴任した。卒業から35年を経て接した東高生の印象は「まじめで礼儀正しい」。その思いはずっと変わらず、教壇を離れるまで、声を荒らげた記憶はない。

担当教科は英語。だが、「国語をちゃんと勉強しなさい」と言い続けてきた。「英作文だって、日本語力がポイントになる」と日本語を学ぶ重要性を説く。英語の専門家として、安易な外来語使用に強い抵抗感を抱く。「スマホとは絶対に言わない。スマートフォンですよ。まして、マイナポイントなんて。

1972年、東高生の仲間入りをすると、思いもかけない事態に直面する。「応援委員」就任である。各クラス2人ずつを送り込むことになっていたが、成り手がいない。「うちのクラスは応援委員はなしで」と報告したが、例外は認められず、クラス委員長だったことから引き受けざるを得なかった。応援委員といえば硬派の代表格と映るが、「ひょろっとしていたし、こわいイメージはなかったはず」と笑う。

応援委員時代の思い出の一つが、2年生だった73年度の全国高校サッカー選手権、母校が決勝まで勝ち上がり、北陽（大阪、現関大北陽）と対戦した。応援委員として会場の大阪・長居競技場に駆け付け、スタンドで声をからした。1－2の惜敗だった。同点間違いなしと思われた中村一義選手の一撃がオフサイドの判定でノーゴール。“幻のゴール”を目の当たりにし、「どんな審判にも勝つチームをつくる」との長池実監督の言葉に胸を熱くしたのを鮮明に覚えている。

東高では必修クラブとして、音楽鑑賞部にも籍を置き、クラシック音楽への造詣も深めた。

静大人文学部へ進学すると、英米文学を専攻。80年に卒業し、民間企業に就職したが、進路を選び直し、同年9月採用で教育界に身を投じた。

最初の赴任校は周智。その後、吉田、掛川西、藤枝西の各高校で教べんをとり、5校目の赴任先として母校に戻ってきた。掛川西時代は半年間、イギリスへ留学。藤枝西では女子高から男女共学高への切り替えも経験した。

母校では2016年度までの6年間、教え子たちと向き合ったところで定年退職。18年度から5年間は非常勤講師として教壇に立った。定年退職までの3年間、念願だった学級担任として生徒たちの成長を見守った。愛飲家だが、この3年間は「断酒をした」という。そこに教師としての矜持を感じ取った。

（会報委員・K）

藤枝東高等学校同窓会
令和4年度 維持費集計（回別）

維持費の納入金額が年々減少しています。

下記内容を参照され卒業回別の横のつながりを強化していただき一人でも多くの方が会費納入にご協力くださるようお願い申し上げます。

参考；30回（昭和32年卒）40回（昭和42年卒）50回（昭和52年卒）
60回（昭和62年卒）70回（平成9年卒）

回	金額	回	金額	回	金額	回	金額	回	金額	回	金額
5	6,200	29	102,000	43	85,800	57	34,000	71	13,000	85	6,400
13	4,200	30	68,800	44	80,400	58	40,000	72	14,400	86	10,800
16	4,200	31	89,600	45	86,000	59	51,000	73	2,200	87	10,400
17	2,000	32	77,800	46	40,200	60	78,200	74	16,800	88	12,800
18	6,200	33	86,200	47	140,200	61	19,200	75	6,600	89	17,200
20	4,200	34	71,400	48	96,800	62	35,800	76	25,000	90	13,000
21	20,800	35	105,000	49	73,000	63	27,000	77	14,200	91	13,200
22	14,400	36	144,200	50	87,200	64	35,400	78	33,600	92	10,600
23	14,400	37	67,400	51	52,600	65	25,000	79	23,400	93	24,000
24	12,800	38	155,200	52	76,000	66	29,800	80	6,400	94	12,800
25	41,400	39	294,600	53	65,600	67	55,400	81	10,600	95	24,000
26	41,400	40	187,400	54	37,400	68	27,600	82	10,600		
27	44,200	41	118,400	55	93,200	69	25,000	83	10,600		
28	94,200	42	97,600	56	77,000	70	18,600	84	15,400	合計	3,927,600

令和5年3月